



畳界の技術革新

畳の製造技術は古くは手縫いで一枚一枚の畳を職人が針を使って仕上げていました。高度成長期になり住宅着工数が増加すると手縫いでは仕事が追いつかないため現在も主流となっている逢着機械が登場し畳店の製造能力は飛躍的に向上しました。

そして、まさにいま畳製造現場に技術革新が起こりつつあります。それは圧着技術です。圧着は畳の表と床を貼り付けてしまうということなのですが、薄畳・縁無し畳の普及によって従来の逢着機械ではカバーできないケースが増加したため誕生した技術です。

この圧着技術により畳の可能性が大きく広がり、これまでの常識を覆すような丸い畳・小さな畳が誕生しています。

家の中に小さく残る和空間だからこそ、個性的に演出するのも悪くないです。



Tatami Mode

畳のインターネット販売で人気を集めている2つの畳縁をご紹介します。

上図右から大きな桜のかわいい縁、左は一瞬ル〇・ヴィトン？かと思うような縁で、今までの畳のイメージより派手な印象です。

(女性から) 選ばれる新しい商品は無難なものからは誕生しないのかもしれない。



都市思慮

島津良樹

What is the city?

「渋谷という街(1)：もういくつかの渋谷人類学」

午後のハチ公広場＋スクランブル交差点からマルキューやセンター街方面は私のような中高年のオヤジには覚悟を決めてから行かねばならない渋谷である。先日、意を決してマルキューに入りギャルたちの迫力・熱気に立ちすくんでしまった。「カワイイ」という嬌声がビル中に充満していた。このスクランブルや駅東の宮益坂下、神宮前の明治通りを朝観察すると大勢のサラリーマンやOLがアタッシュケースやハンドバッグを抱えて足早にオフィスに向かっていく。渋谷でもこんなにオトナが働いているんだ、とビックリする。

彼らより一寸遅くにはバックパックでどこか暗くてオタクっぽいITベンチャー系と思しきお兄さんが同じ通りを歩く。そういえば前世紀の終わり間際にビットバレー現象が渋谷を席卷した。

何人かのサクセスストーリーの体现者を輩出した後このネットバブルも崩壊したかのように見えるが、まだまだ頑張っているトンガリ若者がいる。

渋谷で最も子供が多い一角をご存知だろうか。美竹公園隣の東京都児童会館がいつも大賑わい。東京人なら子供の頃に一度は訪れたなつかしい遊び場だろう。渋谷と広尾は隣町であることもあって、アジア人のメードを従えた白人系の母子もチラホラ見かける。自由に使えるクレオンス鉛筆常備が欧米人の母親の目には奇跡らしい。

渋谷警察角の歩道橋を渡って駅に帰る制服の女子高生はどこかで着替えてからまた繁華街へ繰り出すのだろうか。道玄坂や宇田川町で制服ギャル達を見かけることはまずない。何年前、東急百貨店東横店の壁に大きく「高校生は家に帰って勉強なさい」という広告が出たことがあるがあれはヒットだった。

日曜日午後、並木橋・八幡通り方面の明治通りは黒っぽい男の通りになるのはウインズがあるから。この辺りには列島北から南までのご当地ラーメン屋が軒をそろえた。

さて、バブル崩壊後の「失われた十年」の時期にも渋谷来街者の数は減ることがなかった。毎日40万人が駅から街に入りそして駅に戻っていた。渋谷人種から見た渋谷は実は若者一色ではない。渋谷ヒト観察からの私の結論です。

しまづ・よしき / 都市アナリスト。
京都大学に学び西山卯三に師事。東急総合研究所取締役地域開発研究部長・顧問を経て、立教大学大学院教授。08年よりS&Associatesを主宰。